

戸建て空き家群の再編

岡島功洋

建築デザインコース

高岡市吉久の空き家群を、時間をかけながら繋げていき、住人同士、新しい住人と地域住民とコミュニティを育みながら住み、共同のコミュニティによって「使い」「残し」「育てる」街のような集合住宅へと再編する。

この集合住宅は増殖する空き家を取り込み育てていく。

集合住宅が育ち、住人も増えると、各住戸で部屋や通路、中庭、裏庭を分け合うことにより、広く、豊かな空間を設けることができる。伝統的木造建築群や自然を舞台に、内と外の境界を交錯させ、内と外、光と影、自然などが入り組んだ新たな公共空間を展開していく。そして、この街、集合住宅で行われるアクティビティやコミュニティの総体が街の新たな生活風景として表れていく。



建築デザイン・リノベーション / 集合住宅・コミュニティ施設・木造

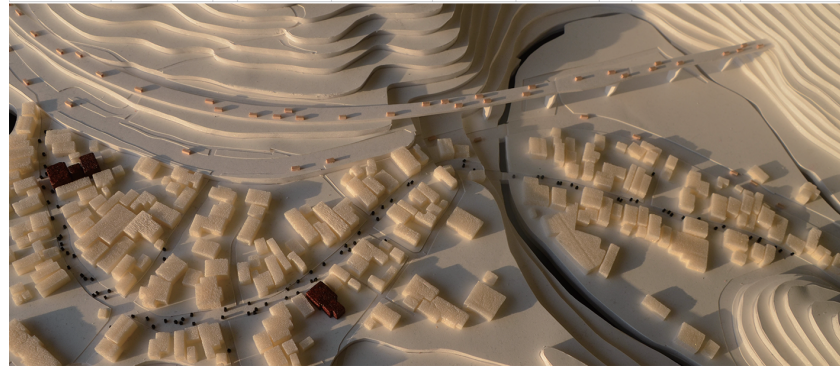
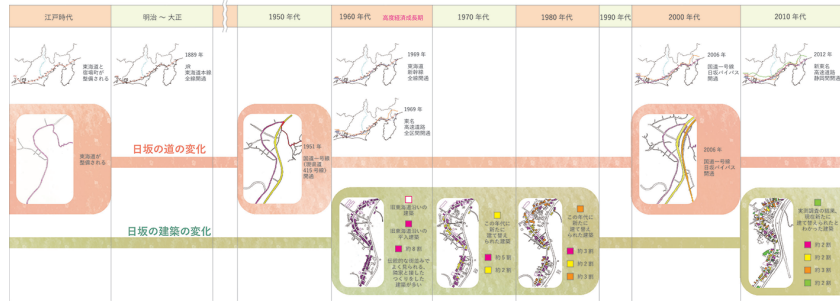
取り残された宿場町、東海道日坂宿の時間・空間的研究 歩く/立ち止まるまちへ

鈴木春菜
建築デザインコース

東海道日坂宿は、かつての面影を残す街並みが残る一方、新たな交通インフラの開発によって取り残された裏通りとなっている。

まず研究として、地域、街並み、建物単体、部分のデザインの継時的分析を行い、それらの関係を整理し、取り残された裏道だからこそ、様々な時代の層が残っているという特徴を明らかにした。

次に提案として、そのような日坂の特徴を保ちつつ人通りを取り戻す仕掛けをデザインした。ここで生み出される通路や仕掛けは、様々な時代の特徴を意識させると同時に、表と裏、過去・現在・未来をつなぐように意図している。



建築デザイン・リノベーション／宿場町再生・木造

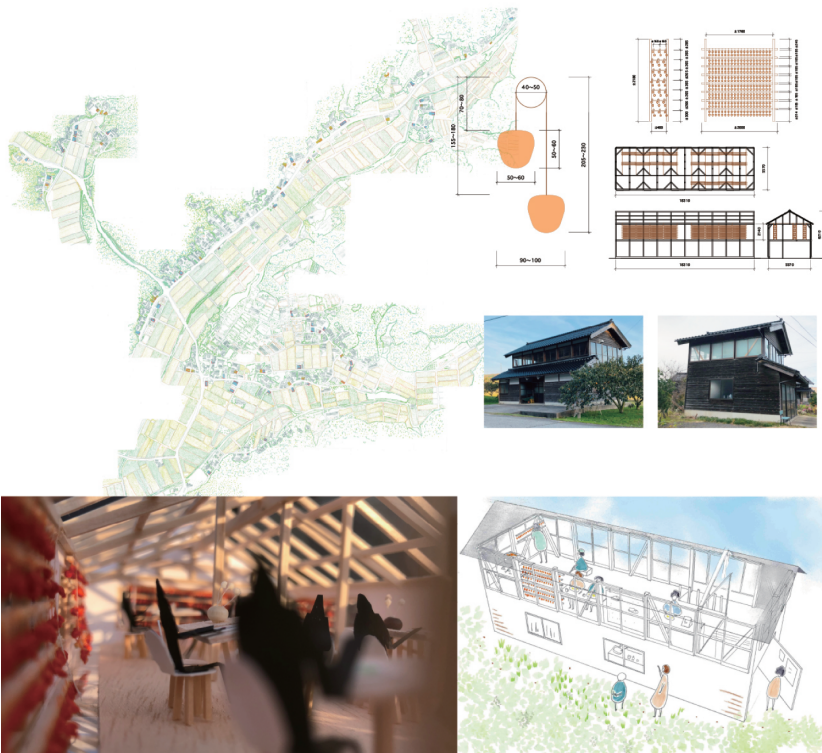
干し柿のある暮らしがつくる集落と建築のかたち

石川県志賀町倉垣・安津見地区における干し柿文化とその持続へ向けて

吉田葵
建築デザインコース

干し柿の生産が盛んである石川県羽咋郡志賀町の特徴的な建築物に興味を持ち、特に倉垣・安津見地区の「集落のかたち」「ひとつの農家の建築群」「干す建築物単体」「干すディテール」ごとに調査・分析し、干し柿作りの生業とそれぞれのスケールのかたちが関係しあっていることを明らかにした。

調査の中で、後継者不足により干し柿文化の衰退を実感した。このことに対して、シェフが倉垣地区に移住してくることをきっかけとしたストーリーに沿って3つの場面の順に提案をし、干し柿文化の持続を図る。「志賀町らしさ」が、2階にある大きな窓から徐々に広がっていく。



建築デザイン・リノベーション／模型・図面・副論文／パネル h2400×w1800mm・模型 h200×w1200×d500mm

うつろい

一千曲市稲荷山地区の

土蔵造り町屋群の継時的変化について

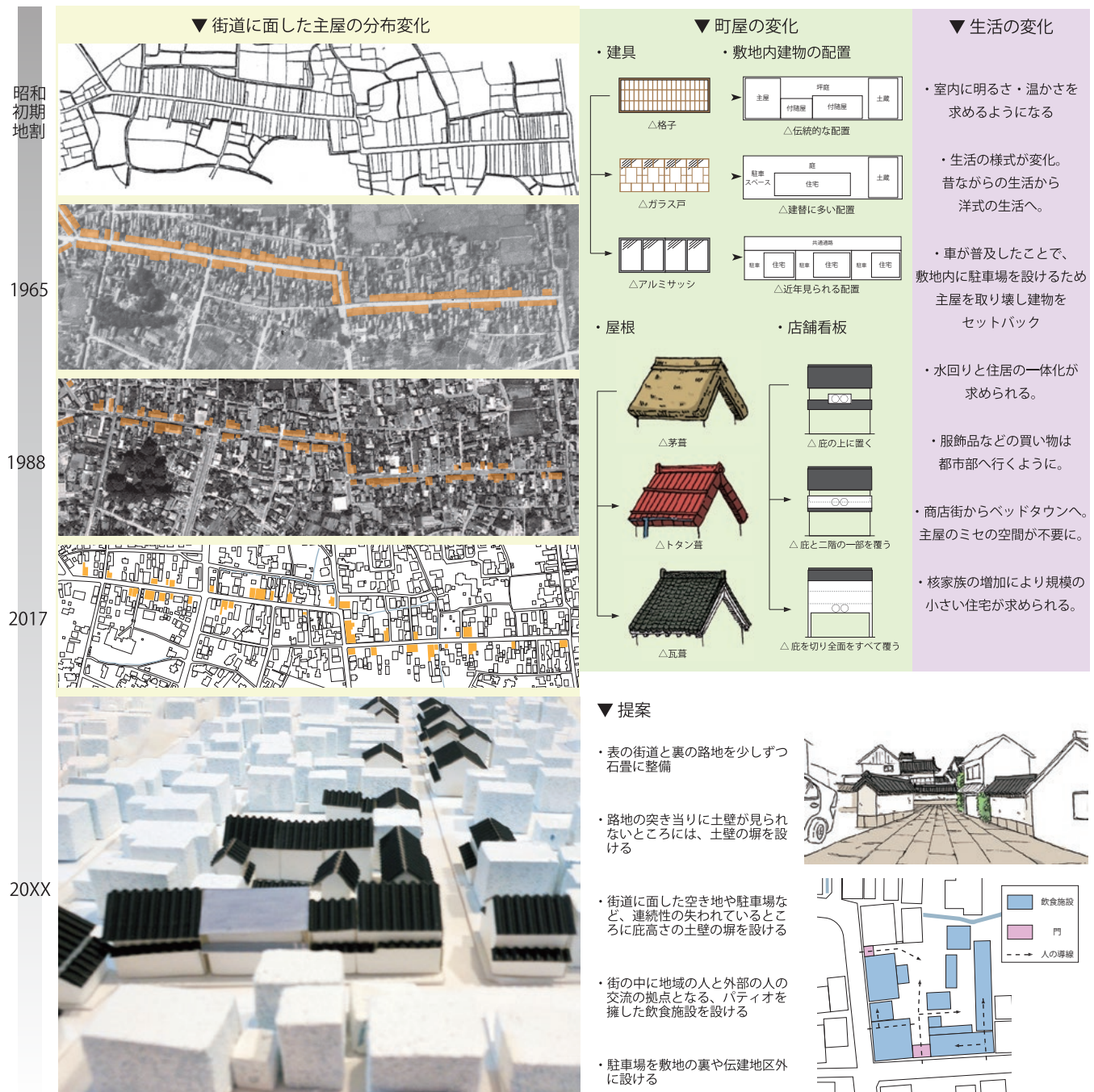
スチレンボード・スタイロフォーム・紙・アクリル板など
h60×w1000×d300mm

江本 有希

造形建築科学コース

重要伝統建造物群保存地区に選定された千曲市稲荷山地区には、土蔵造りや塗屋造りの町屋が多く残っている。一方、老朽化した町屋の取り壊しや生活様式などの変化による町屋の取り壊しや建て替え、空き地に建てられる新築の建物により、かつての母屋が軒を連ねる街並みは分断されている。そのような稲荷山地区について、現地フィールド調査、ヒアリング、航空写真、古写真などをもとに、街並み、建物単体、部分の形や素材について経時的变化を分析し、それらと生活がどのように変化し積層してきたのかを明らかにすることを試みた。

またその結果から、稲荷山がこの街並みを残しながら、さらに30年、50年、…将来にわたって、変化しながらも、持続し、各時代が積層していくことを期待し、空地に伝統的な要素やデザインを用いた建物を建てる、空家をリノベーションすることで町の住民と外から来た人をつなぐ拠点を作る、道などに街の隠れた魅力や時代の層を発見できるような仕掛けを施す、などを提案する。



集落の景観・建築とくらしの継時的変化

—輪島市三井町新保地区と一家族を例に—

図面・模型

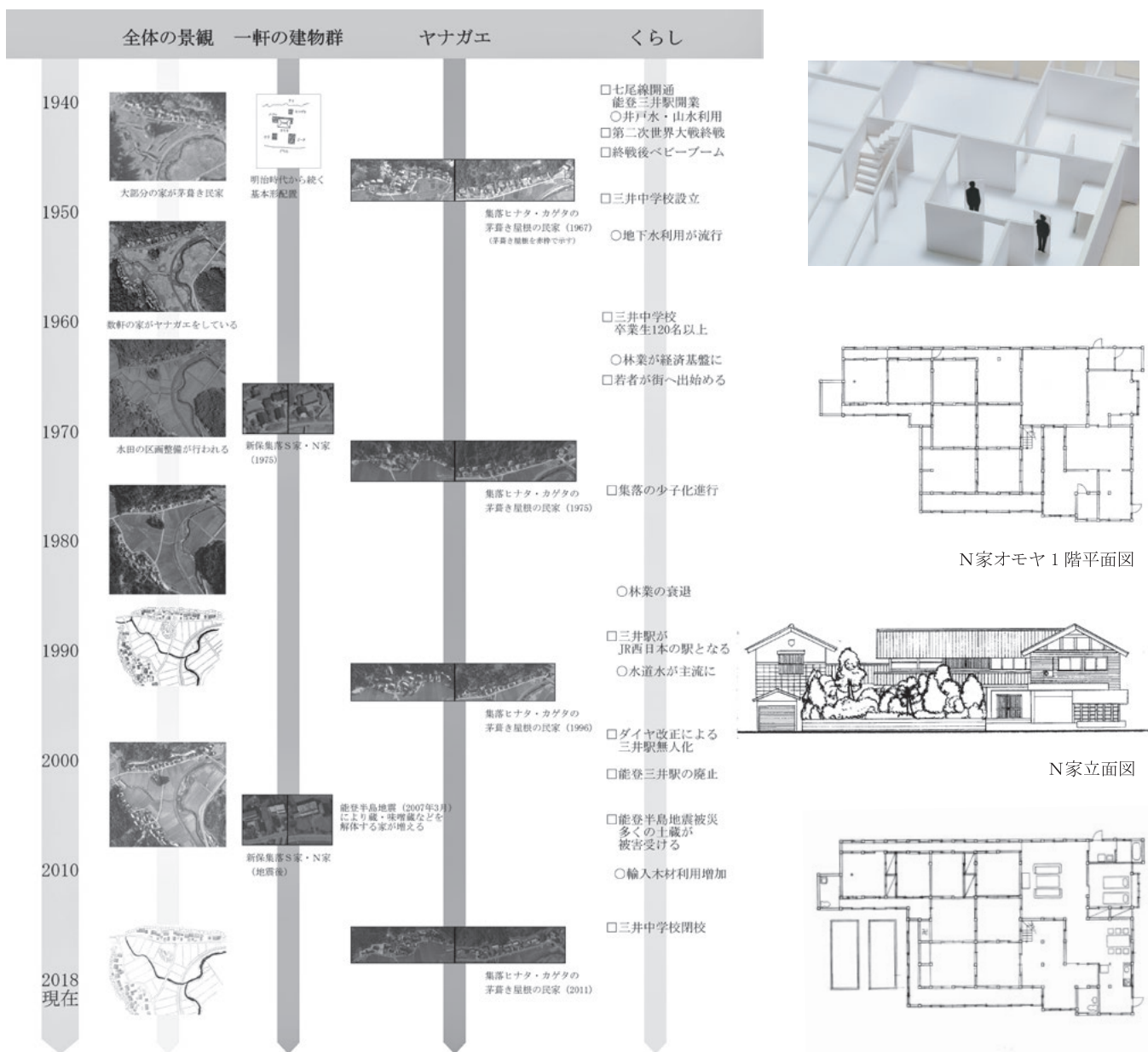
幸崎 加奈

造形建築科学コース

石川県輪島市三井町新保地区は、アテ(能登ヒバ)に覆われた山裾に民家が立ち並び、中央に田んぼが広がる、のどかで懐かしい景観が脈々と継承されてきた。しかし、くらしの変化、建物の変化や解体などにより、景観や建築は変化を続けてきた。

本研究では、新保集落での現地調査やヒアリング、過去に行われた茅葺き民家調査を基に、「集落全体」、「一軒の建物群」、「建物単体」、「部分系や素材」、「住民のくらし」などの観点から、継時的変化と、それらの関連性を探ることを試みた。その結果、茅葺きから瓦葺きへのヤナガエ、能登地震後の土蔵の解体など、「変化するもの」と、母屋の平面系や建物群の構成、自給自足のくらしなど、「不変なもの」の両方があることで、緩やかな変化を確認できた。

次に、本研究の展開として、新保集落の一家族であるN家を例に、将来の家族構成やライフスタイルの変化に応じて、「変化するもの」、「不変なもの」を意識しながら、持続するくらしのデザインを試みた。



新保集落の継時的変化 (2018年現在まで)

自然との調和との調和と対立

—北アルプス室堂周辺における山小屋の研究—

スチレンボード・発砲スチロール・木材・段ボール
h350×w420×d590mm

佐伯 江里子

造形建築科学コース

北アルプス室堂周辺における14の山小屋について研究を行い、その展開としてひとつの山小屋の持続的な将来計画を試みた。

研究においては、共時的研究として、平面・断面・外壁素材などの建築的要素と気候・土壌・水などの環境的要素を抽出し、それらの関係を分析した。次に、継時的研究として、山小屋の建築的変遷を分析した。その結果、「調和」と「対立」は相反せず、どちらの面も持ち合わせながら成立していることがわかった。

その展開として、雪崩・雪圧被害により倒壊・移築を繰り返した過去がある内蔵助山荘(くらのすけさんそう)を例に、長期的な建築計画を行った。具体的には、数年後に再度倒壊してしまったと想定し、倒壊した基礎を防壁として活用、部材のリサイクル、小規模建物の集合体によるデザイン、部材の規格化(小断面の短い木材他)、などの手法を用い、倒壊しても早期再建を可能とし、式年遷宮のように移築・再生を繰り返しながら自然とともに生き続ける山小屋のあり方を提案する。

内蔵助山荘の変遷



↓ 昭和30年代



↓ 昭和40年代

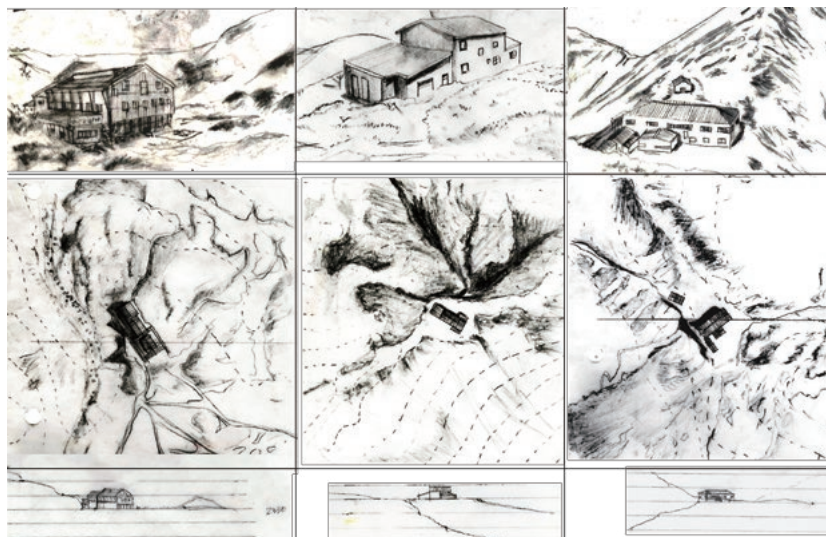


↓ ~平成20年代



現在

平面・断面スケッチ



これからの内蔵助山荘

アントニン・レーモンドの 木造住宅に関する研究

—主要なる細部（ディテール）に注目して—

紙・スチレンボード・発泡スチロール・粘土・木

中村 真白

造形建築科学コース

アントニン・レーモンドは日本でも活躍をした建築家。彼が日本で設計を行った住宅には丸太をそのまま使用した構造、様々な形状の平面形、独特なディテールなど多くの特徴がある。そこで、本研究では、彼が日本で設計を行った木造住宅に焦点を絞り、全体形のデザインの多様性と、それを成り立たせている細部(ディテール)のデザインとの関係性を探った。

レーモンドの作品を、平面形の違いから四角・円・扇に分類し、その特徴を持つ代表的な3軒、井上邸(四角)、軽井沢の新スタジオ(円)、もみの木の家(扇)を研究対象として、それぞれの平面・断面・細部の研究や分析を行った。

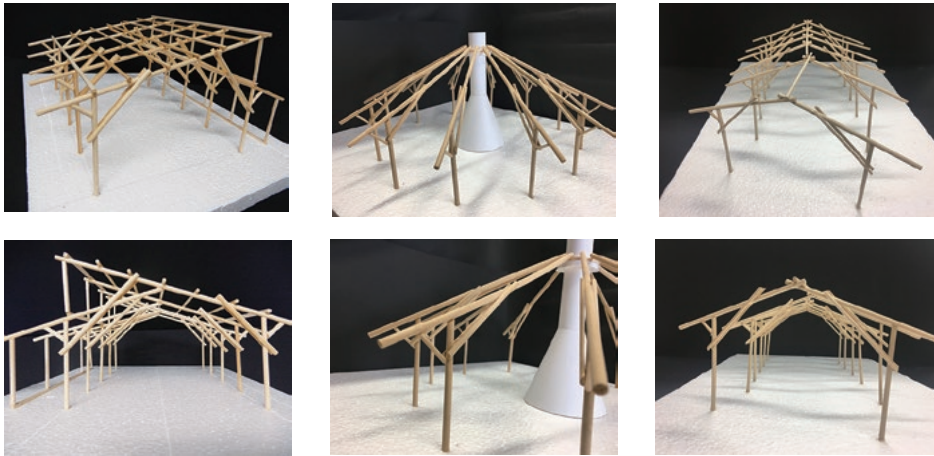
その結果をもとに、展開として、レーモンドの設計手法を応用し、様々な環境に柔軟に対応できる小屋・様々な条件が変化しても、柔軟に対応ができる構造のシステムの設計を行った。

井上邸

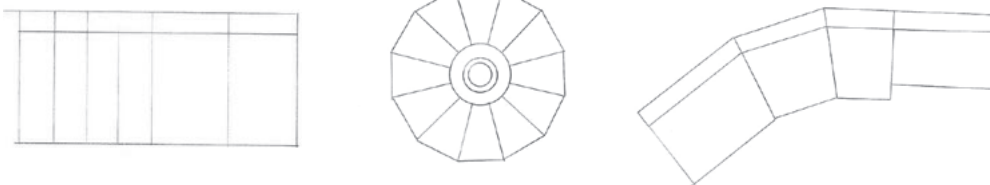
軽井沢の新スタジオ

もみの木の家

全体



平面



断面



展開

